

近現代史ゼミ・2022年12月4日の報告

—群馬の満州開拓移民史～木瀬村を中心に（宮崎俊弥講師）—

今回は宮崎俊弥さんに講師をお願いしました。宮崎俊弥さんは県内の公立高校、県史編さん室、県立文書館等を経て、共愛学園前橋国際大学に勤務され、現在は同大学名誉教授。専攻は日本近代史（特に県の蚕糸業史、農業史、農村史）。

満蒙開拓とは何だったのか

1, 満州への日本からの農業移民団が満蒙開拓団

日露戦争後、1906年（明治39年）、ロシアの東清鉄道南部は日本に譲渡され南満州鉄道（満鉄）となり、日本の満州進出の基盤ができた。最初は満鉄の守備隊から始まった満州の日本軍は1919年（大正8年）関東軍となり、1928年（昭和3年）の張作霖爆殺や1931年（昭和6年）の柳条湖事件など実行、満州事変を引き起こし、1932年（昭和7年）に「満州国」が建国された。「満州国」は日本が一方向的に作った傀儡国家で、国際連盟では否認された。

○満蒙開拓2つの目的

- ① 軍事的目的—関東軍を支え「満州国」を安定化させる。また、北のソ連への備えという役割もあった。これらがブラジル移民など他の移民と違うところで、軍事的要素が非常に強い移民だった。
- ② 農業政策—世界恐慌の影響が日本にも及んだ昭和恐慌（1930～31）は農村に大打撃を与え、全国的に農村救済の声が広がった。特に農家の次三男などの農村の余剰人口を満州へという動きになった。

2, 関東軍を動かし移民を実行、推進した3人

- 加藤完治（1884～1967）—農本主義者、皇国農民運動、農村教育の立場で積極的に満州移民推進
 - 石原莞爾（1889～1949）—関東軍主任参謀、「満州国」創設推進、満州移民計画化
 - 東宮鉄男（1892～1937）—関東軍将校、石原莞爾の下で具体的に移民計画準備
- ※特に石原、東宮の2人が関東軍の満州移民計画を積極的に進めた。

3, 「武装移民」から本格的な「国策移民」へ

- 最初は武装移民（1932・昭和7年～）—「銃」と「鋤」を持つ、農民と軍人を兼ねた移民（屯墾軍）で、昭和恐慌で生活が困窮していた関東東北の在郷軍人農家出身者がソ満国境（弥栄村）へ入った

が、なかなかうまくいかなかった。屯墾病（「匪賊」の襲撃、酷寒、不慣れな生活習慣などが原因での病気）にかかる者が多かった。

- 本格的な「国策移民」へ—1936年（昭和11年）、広田弘毅内閣の「満州農業移民百万戸送出計画」、この計画は20年間に100万戸×（一戸5人）＝500万人の農業移民を送出する計画だった。スローガンは「五族協和」「王道楽土」、そして「20町歩の地主になれる」という宣伝、敗戦までに全国から27万人（長野県阿智村の満蒙開拓平和記念館によれば27万人、他に32万人という説もある）が移住した。

- 4, 満蒙開拓青少年義勇軍発足—1938年（昭和13年）前年（1937年～）日中戦争が始まり、応召増加で成人男性の開拓団募集が難しくなったため、足りない分を青少年でまかなおうとする動きが出てきた。高等小卒の青少年（14～15歳中心）の募集に学校の教員が積極的に協力した。移民の3割以上を占める。国内（2か月）、現地での訓練（3年）を経て開拓団に加わった。

5, 群馬県の満州開拓

1938年（昭和13年）「満州開拓民募集要項」を決定し、県をあげて移民奨励した。生糸の輸出困難で群馬の養蚕不況は深刻化、また群馬は推進者の東宮大佐の出身地でもあったことから移民を推進し、移民数は全国で11番目に多かった（最多は長野県）。

敗戦までに約7000人、青少年義勇軍1800人が渡満、しかし敗戦の混乱で1700人が死亡、軍への応召者は多くがシベリアへ抑留された。未帰還者もいて、「残留孤児」（12歳以下）、「残留婦人」となった。

勢多郡木瀬村の満州開拓分村

1, 当時の木瀬村

- 木瀬村は前橋近郊、人口1万人の豊かな村であった。また、木瀬村の大字のひとつ、野中の清水及

衛 (1874~1941) を中心に 1892 年 (明治 25 年) 「野中積縄組合」が設立された。これは「産業組合」(後の農協、JA) の最初と言われる。農家の平均耕地面積 1 町歩、米麦の二毛作、養蚕、酪農も行った。特に養蚕は現金収入として重要だった。

○村民の半数を満州に送出した長野県の大日向村などのように、山がちで耕地が少ない村が満州に移民する例が多かった。群馬県ではなぜ豊かな木瀬村が一番熱心に満州移民を推進したのか。

○1933 年 (昭和 8 年)、木瀬村は農村経済更生運動に参加した。この運動は農村不況を打開するために政府が打ち出した政策であった。そして 1938 年 (昭和 13 年)、木瀬村は更生運動の大きな柱、村是として満州開拓を決定した。

2, 満州開拓運動の指導者の存在が大きかった

木瀬村の農業指導者であった清水及衛は満州開拓移民を推進した加藤完治と親交があり、その考えに賛同して村の満州開拓を提案した。清水及衛の長男、清水圭太郎 (1894~1985) も分村移民運動を推進した。

3, 分村移民の実施

- ・1937 年 (昭和 12 年) 東宮少佐来県、清水圭太郎らに影響
- ・1939 年 (昭和 13 年) 満州分村移民決行村民大会、村に特別助成金交付
- ・1940 年 (昭和 15 年) 第二次先遣隊 (隊長清水圭太郎)、吉林省盤石県驛馬村へ

4, 驛馬開拓団

驛馬村は満州南部に位置する。驛馬開拓団は木瀬村を中心 (約半数は県内各地から) とする一般群馬開拓団で、総員 620 人余、163 戸 (昭和 17 年)。しかし現地には満鮮人 6000 名が居住しており、日本からの開拓団はそこに割って入り、現地人の土地を安く強制買収して入植した。土地を失った現地人は日本人入植者に使用される苦力 (クーリー) となり、そうした現地人には日本人への反感も当然うまれた。

1942 年 (昭和 17 年) には清水圭太郎が開拓団長になった。畜産主体で満州有数の「模範開拓団」となった。

敗戦直前には青壮年男子は軍に「根こそぎ動員」され、残されたのは老人、女性と子ども。治安は悪化し、伝染病などで開拓団は 500 人余になり、この状態で敗戦を迎えることになった。

敗戦で開拓団壊滅、必死の引揚げ、再度の入植

1, 敗戦、引揚げ

1945 年 (昭和 20 年) 戦況悪化により関東軍は南満に撤退し、開拓民を守る軍隊はいなくなった。日本が領有していた朝鮮半島 (皇土) を守るためというのが撤退の名目だった。8 月 9 日にソ連軍が侵攻開始。15 日の敗戦後も侵攻は続いた。

8 月 20 日、開拓団は驛馬村を離れたが、途中「土匪」の襲撃で 36 名が死亡、団長が人質となったが知り合いの苦力の嘆願で助かった。その後、驛馬村の隣村で冬を越すが、現地人やソ連兵の襲撃、婦女暴行の恐怖、酷寒、栄養失調、伝染病などで 56 名死亡。

1946 年 (昭和 21 年) 7 月から列車、引き揚げ船を乗り継ぎ 9 月に博多に上陸、9 月 8 日に駒形駅に到着した。開拓団が驛馬村を出てから 1 年以上が経っていた。

2, 戦後は北軽井沢大屋原に入植

引揚げ者たちは、戦後の食糧難の中、しばらくは親類や知人のもとで暮らしたが、そこには自分たちの生活の基盤はなく、政府は引揚げ者に新たな開拓を奨励した。

県内の引揚げ者たちは、榛名山、赤城山、浅間山麓などに入植したが、旧驛馬開拓団の多くは浅間山麓の北軽井沢 (吾妻郡長野原町大屋原地区) に入植を決定。そこは標高 1200 メートルの火山灰土、熊笹と唐松林の土地、苦難の開墾事業だったが酪農を主体とし、高度経済成長期まで発展、1968 年には「朝日農業賞」を受賞した。現在は離農が進んでいるが、酪農、観光農業で農業を続けている人もいる。

おわりに

戦争の持つ「被害」「加害」の二面性

- ①被害者としての開拓団—敗戦時の混乱、苦難の引揚げ、死者、残留日本人
- ②加害者としての開拓団—傀儡国家「満州国」への加担、土地の強制買収、奪取、差別
この加害の側面については、後から学んで気づいたことである。加害の側面もあるため、引揚げ者の多くは、その体験については触れたくないという態度になりがちだった。

※戦後の大屋原 (北軽) 地区への再度の開拓の気概には学ぶところが大きい。

(文責、設楽春樹)